

校長会 みえ No. 65

●発行 三重県小中学校長会 津市桜橋 2-142 三重県教育文化会館内
TEL 059-227-7011 E-mail info@mie-kochokai.com
●編集 三重県小中学校長会 広報委員会
●印刷 光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1 TEL 0598-29-1234



私の学校づくり

安心して通える 学校づくり



志摩市立浜島小学校 校長 八橋 浩子

本校は、全校児童50名の市内で一番小さな小学校です。わたしは、新任校長として、「子どもが安心して通える学校づくり」をテーマに、次の4点を大切にしてきました。

1点目は、危機管理の取組です。けがや体調不良が発生した際の迅速な体制づくりや救急車要請時の対応マニュアルの詳細化など、命を守る学校環境づくりを行ってきました。

2点目は、子ども一人一人が大切にされる取組です。子どもの思いや暮らしの中の「光」を見出す学習活動の創造に努めています。

3点目は、一人一人の豊かな学びを保証する取組です。

4点目は、地域の担い手としての意識を高める取組です。これまでの学習内容を踏まえながら、各学年のオリジナルティを生かした学習内容づくりを大切にしています。

これらの取組を下支えしているのが、保護者の温かい協力です。そして、「希望のひかり」である子どもたちを見守り、育ててくれる地域の方々の豊かな関わりです。

例えば、地域の方が講師となって、稲作体験学習や苺の苗植えが行われます。また、PTAが中心となって夏祭りなども行われます。

子どもたちと町を歩けば、「今日は、何の勉強や?」「子どもは浜島の宝やでなあ。なんでも言ってきてな。」と心強い言葉をかけていただきます。

保護者、地域、学校が気軽に話せる関係が築けると、そのことが子どもたちにとって、最も安心できる環境となります。「子どもの可能性を伸ばし、さらに成長させていく」という共通の目的をもって、今後もさらに取組を続けていきたいと思っています。

今日的課題の 克服に向けて

自ら考え、行動できる 子ども・教職員を目指して ～大規模な地震災害に備えて～

御浜町立阿田和小学校 校長
道中 朋孝



令和6年1月に石川県能登地方にマグニチュード7.6の地震が発生しました。また、同年8月には、日向灘を震源とするマグニチュード7.1の地震が発生しました。日向灘での地震により、気象庁からは、南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）が初めて発表されました。令和6年を振り返ると、最大震度5弱以上の地震が数多く発生しました。

阿田和小学校は、三重県南部の御浜町内の海沿いにあり、学校の海拔は5.3メートルで、学校のすぐそばには2本の川が流れています。地震が発生した場合、10分程度で津波が到達すると予想されています。

本校は、子どもも教職員も「自分の命は自分で守る」ことを大切に、災害の発生を未然に防ぎ、被害を最小限に抑えるために「備える」ことや「命を守る」ことに重点を置いて安心・安全な学校教育活動を進めています。また、年間を通して防災研修、避難訓練、防災学習を行っています。

今年度も、新しい教職員組織体制となった4月に御浜町役場内の防災担当職員を招聘し、学校周辺を歩き、自分の目で立地条件を確認することで本校における防災に係る取組の必要性を確認しました。

防災学習としては、御浜町教育委員会の協力を得て、三重大学の川口淳教授を招聘し、5年生では「ストローハウス」、6年生では「タウンウォッチング」の体験学習を行いました。また、授業参観において保護者や学校運営協議会委員にも参加を呼びかけ、防災ノートを活用した防災学習や5・6年生と保護者等を対象とした川口教授による防災講演会を行いました。さらに、三重県教育委員会の防災教育推進支援事業を活用し、起震車体験や液化化実験などの学習を通して防災への意識を高めてきました。

地震は、いつ発生するか分かりません。地震が発生した時には、迅速かつ適切に対応できるよう準備し、子ども・

教職員が自ら判断し、安全を確保して行動することが重要です。そのためには、今後も子ども・教職員が地震について正しく理解し知識を身に付け、防災学習や避難訓練等を通して、子どもも教職員も判断力・行動力を養い、「自分の命は自分で守る」ための取組を進めていきます。

ユニバーサルデザイン の授業を

伊勢市立桜浜中学校 校長
下田 敦子



「8.8%。」1クラスに在籍する「知的発達に遅れはないものの学習面または行動面において著しい困難を示す子ども(小中学生)」の割合です。本校は本年度、授業のユニバーサルデザイン(以下UDとする)化を校内研修の柱としています。授業にUDの視点を取り入れ、みんなが楽しく学び合い「わかる・できる」授業を目指しているところです。今ごろ?今さら?なのかも知れませんが、全教科において取り組めるテーマであるため、全職員が自分の課題として取り組めることがメリットです。

夏季休業中には大学の先生を招いて研修を行いました。研究授業に取り組んだ授業者は、それが決まった夏前から授業計画を練り、夏の研修以降、毎時間授業の流れを板書するなどUDを意識した授業を実践していました。研究授業は2年生の国語科で行われ、自分たちが作った短歌を味わう授業でした。研究授業は、どの子も参加しやすい、考えやすい、発表しやすい工夫のある授業でした。安心して発言できる仲間に支えられた授業でもありました。授業後の協議の中で、市教委の指導主事から授業のUD化のポイントが7点示されました。「学習・行動のルールの明示」「視覚的な支援」「明確な学習の流れ・発問・板書」「見通しやすい指示・説明」「子どもの個人差への対応」そして、これらを実現するために「整理整頓された教室」と「聴き合える仲間が不可欠であること」よくよく考えると、どれも特別なことではありません。どれだけ子どもの側に立てるかということです。

30年前に大先輩から「わかる授業と楽しい授業とは違う」と教えられました。わかる授業を作るために試行錯誤したことは、あとでチョークを握っている側の楽しかった思い出として残ります。そんな楽しさを職員と共有していきたいものです。

8.8%。1クラスに2～3人です。今後も、その2～3人も「楽しい」「わかる」「できる」と感じられる授業づくりに全職員で取り組んでいきます。

研究大会報告

◆全連小徳島大会報告◆



持続可能で豊かな 未来を切り拓く人 財を育むために…

木曾岬町立木曾岬小学校 校長
水谷 昌之

第76回徳島大会が開催され、桑名郡市からは3名が参加しました。コロナ禍以後、参集型としては初めての地方大会ということ



で、徳島県小学校長会の方々は大変緊張されていましたが、円滑な大会運営のもと温かく迎えていただき、充実した研究協議の2日間となりました。

開会式では、徳島市長さんが阿波踊りを披露され、地方都市ならではの歓迎でした。続いて、文部科学省講話、全体会でした。

午後は13分科会に分かれて研究協議を行いました。私は第11分科会に参加しました。「社会形成能力」というテーマのもと、「持続可能な社会を創造する力を育む教育活動の推進」という研究課題に沿って報告された教育実践を踏まえ、グループ協議を行いました。

愛知県北設楽郡設楽町立田口小学校より、北設楽郡の恵まれた自然や地域の文化・伝統を踏まえた「ふるさと学習」の教育実践を支える校長の役割について、郡内小中学校長会でまとめられた研究の成果を報告していただきました。

次に、高知県宿毛市立宿毛小学校からは、宿毛市でのキャリア教育の研究成果を踏まえた教育実践（キャリア教育の視点を取り入れた授業づくり等）について報告していただきました。

いずれも、校長としての具体的な実践報告で、校長の役割を再認識する機会となりました。

2日目の全体会では研究協議のまとめを行いました。続く記念講演「神山まるごと高専の挑戦」では、「学校は社会と繋がっていますか」という言葉がありました。この言葉は校長の役割として大切なキーワードであると思いました。

◆全日中岩手大会報告◆



全日中岩手大会に 参加して

御浜町立尾呂志学園小・中学校 校長
高田 有治

「未来への一步を、共に、黄金の國いわてから」のスローガンが掲げられ、開会式の挨拶からも「過去の災害から立ち上がり」、そして、「予測困難な未来へ立ち向かおうとする」志が感じられました。岩手の気温はとて肌寒く感じられましたが、教育への熱い志がひしひしと伝わってきました。

文部科学省説明は、「教師が学ばせる」から「子どもが自ら学ぶ」への発想の転換から始まり、多くの気づきが得られる内容でした。特に「チョーク&トーク」の時代が過去のものであると改めて実感させられました。

全体協議会では、ウェルビーイングを高めるための教育実践の発表や、へき地校の特色を生かした組織・運営体制を築くための校長の実践について発表がありました。生徒のウェルビーイングを高めるためにも、教師のウェルビーイングを高めることがいかに大切であるかについて、改めて考えさせられる機会となりました。

分科会では、二人の発表者がそれぞれ30分間（発表25分間、質疑応答5分間）を担当し、その後のグループ協議において、全国から集まった校長との意見交換ができました。全国大会ゆえの醍醐味を感じられるととても有意義な時間を過ごさせていただきました。

記念講演でも、天文学者である講師から貴重な話を聞くことができ、たいへん有意義な二日間を経験させていただき、新たな活力を得て帰路に就くことができました。貴重な機会を与えていただいたことに感謝致します。



◆東陸連小愛知大会報告◆



組織的かつ継続的な 視点を持つ

松阪市立東黒部小学校 校長
伊達 隆

1日目(10/17)午後から分科会(ウインクあいち)がありました。私は第6分科会「健やかな体」に参加しました。分科会では研究課題「健やかな体をはぐくむカリキュラム・マネジメントの推進」のもと、協議が行われました。

〈視点1〉石川県金沢市立千坂小学校の発表では、校長は子どもたちや教職員の健康的な生活や体力の維持・増進に気を配りながら常に組織的かつ継続的な視点をもって学校運営していくことが大切であるとまとめられていました。

〈視点2〉愛知県瀬戸市立幡山西小学校の発表では、校長の役割として学校が抱える課題を解決しながら、より高い目標に向け、学校内外の人物・物的資源を的確に把握し有効活用することが求められると結ばれていました。

グループ別協議では、視点1、2とも各学校の組織や体制について話が深められ、校長のリーダーシップのあり方にまで話は及びました。また、普段の取組や悩み事相談まで幅広く意見交換がなされ、大変有意義な時間となりました。

2日目(10/18)は、会場を常滑市民文化会館に移して全体会、記念講演がありました。記念講演では「将棋界における若い世代との接し方」と題して、棋士の杉本昌隆さんの講演がありました。師匠として若い棋士との接し



方のポイントを紹介していただき、世代交代が急速に進む中、ご示唆をいただいたように思います。後半にはサプライズもあり、お話

に引き込まれた時間でもありました。

今回、あっという間に時間が過ぎてしまいましたが、多くの収穫を得られた2日間でした。



◆東陸中福井大会報告◆



意味と未来の姿を 伝えるリーダーの 姿によって組織を 育てる

鈴鹿市立鼓ヶ浦中学校 校長
羽山 哉美



新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく人を育てるという主題のもと、8つの分科会での研究発表が福井の地で行われ、私は「よりよく生きようとする意思や能力を育む道德教育の充実」に参加しました。

小中一貫、全市を挙げて道德教育に力を入れている静岡県藤枝市の発表の中で目を引いたことは、人と支えあい、つながり、関わり合うことを大切に「ピア・サポート活動」での9年間のつながりを明確にして、系統的・計画的に行うことで、思いやりの心を育もうとしていることです。また、小中が同教材で授業を行うことにより、子どもの価値観の変容等を確認し検証することができ、いっそう内容の精選が進んでいるということです。そのためには、市校長会が「心の教育」を方針に掲げ、各校で校長がリーダーシップを発揮し、道德教育の必要性を常に教職員に伝え続けるとともに、道德教育推進教員を核として校内にその意識を浸透させるよう指導し、体制や仕組みを整えていったことがわかりました。

翌日の全体会では、書家でプレゼンテーションクリエイターの前田鎌利さんによる記念講演がありました。長年通信業界に従事していた経験から、現在の会社経営においての大変興味深いマネジメントの仕方を流暢に、ポイントを絞ってお話いただきました。学校も人の集まり。質問力・共感力のあるコミュニケーションによって人の意識を変えることができること、また、意味と未来の姿を伝えるリーダーの姿が、自走力(内発的動機付け)によって仕事ができる集団を作るという力強いお話を聞くことができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。



三重大会報告

小学校長教育研究大会



第61回小学校長教育研究大会に参加して

多気町立外城田小学校 校長
小林 久美

午前の全体会では、来年度行われる第60回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究三重大会の研究主題や概要説明がされ、これから1年間、実行委員の方々を中心に校長会全会員での取組、準備が必要であることを感じました。



午後の分科会では、第6分科会「健やかな体」に参加しました。そこでは、「健やかな体を育むカリキュラム・マネジメントの推進」を研究課題として、亀山市の取組報告をもとに、グループに分かれて活発な協議が行われました。

報告のあった亀山市の3小学校では、市学校教育ビジョンの中の「健やかな身体の育成」のため、学校規模に合わせて特色ある実践がされています。特に、子どもたちが日常生活の中で、登下校や遊びを通して体力づくりをしていくことが難しくなっている現状から、子どもたちがすぐに遊べる環境の整備や学校での体育の授業改善や体力づくり、保健指導、食教育の重要性に共感しました。そして、子どもたちの体力向上を目指し、学校の重点課題の一つとして、いかに校長としての役割を果たしていくべきかについても、改めて考えていかななくてはならないと確認し合うことができました。

本分科会に参加して、体力向上に向け、継続して取り組んでいくこと、地域とともに多様な関わり方をしていくこと



など、普段なかなか聞くことができない県内の各地域各学校の事例をたくさん聞かせていただき、今後の取組に、たいへん参考になりました。

中学校長研究大会



第61回三重県中学校長研究大会に参加して

名張市立南中学校 校長
藤山 正道



令和6年度の中学校長研究大会が8月20日に県総合文化センターで行われました。

記念講演では、志摩観光ホテル総料理長の樋口宏江さんより「伊勢志摩ガストロノミー～志摩観光ホテルの料理哲学とおもてなしの心～」と題して講演をいただきました。ホテルと学校という職場は違いますが、リーダーとして大切にすべきこと、後進を育てることについて大きな学びがありました。

午後からの分科会では、第7分科会「多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成」に、提案者として参加しました。提案は「自律的・継続的に学び続ける教師の育成」という主題で、名張市における教員の資質向上を目指す研修の取組や各校におけるOJTの仕組みを提案しました。OJTについては、「分掌会議の研修的な利用」や「管理職によるショートミーティング」、「人材育成を考慮した校務分掌の割当」などの取組を紹介しました。学校での人材育成は、日々の業務に追われていることから、そのためだけの時間を確保することは難しくなっています。そこで、現場での実務をベテランとともに行うことを通して育成していくことを意識し、そのための効率的な仕組み作りの実践例の提案となりました。

参加された先生方からは、たくさんの質問や意見、また各校の取組を紹介いただき、充実した学びの場とすることができました。



◆本部役員だより◆



新しい取組が 動き出した1年

三重県小中学校長会 中学校部会長
古市 卓司

令和6年度は、教育に関わる新しい取組が動き出した1年でした。3月に策定された「三重県教育ビジョン」では、現代は将来の予測が困難な時代であることから「子どもたちに育みたい力」として、「創造する力」が新たに加えられました。また、中教審が令和3年1月に提言した「個別最適な学び」と「協働的な学び」を受けて改訂された教科書が、4月から小学校で使用されています。

全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を目指し、教師中心から子ども中心の授業への転換、そして「主体的・対話的で深い学び」を実践する教育活動のさらなる推進が求められています。

また、段階的定年延長や特例任用校長制度、教員採用試験の6月実施なども始まりました。しかし、慢性的といわれる教員不足を解消させるためには、教職員の働き方改革のさらなる加速化と、これからの学校教育を担うに必要な資質を持つ教職員の育成が不可欠です。子どもたちを取り巻く環境が加速度的に変化し続ける中で、教職員が望む研修を受講できたり、自己研鑽に励んだりできる環境が整うことで、「主体的に学ぶ教職員」の実現につながります。そして、このことが自信となり、教職の魅力が再認識され、質の高い教職員の確保と育成につながります。引き続き教職員との対話をとおして、計画的で効果的な研修の受講を奨励し「令和の日本型学校教育」の推進に向けた原動力となる教職員を育成してまいりましょう。

最後に、会員の皆様には三重県小中学校長会の諸活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。本部役員一同、心より感謝申し上げます。

◆県立学校長会との懇談会◆



中村公治幹事



矢田哲也幹事

小中高での 教育課題を 共有

10月22日(火)に三重県教育文化会館にて、「令和6年度三重県立学校長会と三重県小中学校長会との役員懇談会」が、県立学校8名、小中学校13名の参加のもと開催されました。

はじめに「教員確保の方策」について、県立学校より提案があり、昨年度からは特に厳しい状況にあり、産育休、病休などの代替においては各校で探すことが前提となっているなど、各地区、各校の現状を中心に情報交換しました。若手教員の離職、教員不足は県立学校、小中学校ともに喫緊の課題であることが分かりました。教育実習生の数、採用試験の受験者数が減少してきており、若者が教員を目指すよう職場体験などのキャリア教育の重要性にも話が及びました。また、県立学校では、他職種の免許を持っている職員にその経験を活かせる教科での臨時免許を発行し、教壇に立ってもらっているという状況も知ることができました。

次に「不登校児童生徒の現状とその対策」について、小中学校のアンケート結果から支援方法や内容等の提案を行いました。不登校生徒はコロナ禍を境に増加しているとともに、登校できても教室に入れない、いわゆる保健室登校の児童生徒も増え、学習面だけでなく心のサポートを必要とする児童生徒が多くいるといった現状が分かりました。不登校児童生徒への対応が多岐にわたっているのは、県立学校も小中学校も同じ状況でした。また、今後は来年新設される公立夜間中学の「学びの多様化学校コース」へのニーズを注視し連携を図ることで、学びのサポートの在り方のヒントにつながるのではないかと提案しました。加えて、児童生徒の社会的自立だけでなく、毎日の欠席連絡も含めた保護者支援も必要との話で結びました。

最後に「管理職選考及び特例任用」について、県立学校も小中学校も管理職の確保が課題であることが話題となりました。教頭選考受験者が校長選考受験者を下回っていること、特例任用校長についての現状を確認しました。改善策として、小中学校から、主幹教諭、指導教諭への声掛けや、日々の勤務の中で管理職の魅力を伝え、楽しさ、やりがいを見せることが、次の管理職を育てる一助になっているとの話がありました。

教育をめぐる課題は、保護者・地域・行政をはじめ、あらゆる機関との連携を図る必要があります。保幼小中の連携に留まらず、中高が互いに連携・協力し、12年間を通した子どもの育成に向けて、日常的に議論すること、互いに力を合わせて取り組んでいくことを確認した有意義な懇談となりました。

随 想



38年間、自分を 育ててくれた 学校に感謝

津市立一身田小学校 校長
三浪 秀信

先日、児童から「校長って楽しい? なった時嬉しかった?」と聞かれ、考え込んだ末、「楽しいこともあれば苦しいこともある。なった時は嬉しさより頑張らなという気持ちで緊張した。」と答えました。教頭の時も、校長の時も、着任したときは緊張しかありませんでした。「教頭先生!」と呼ばれても自分のこととは気づかなかったり、「校長先生!」と呼ばれた時も、未だに自分のことではないような気がしたりしています。

校長としての6年間は「精神的にしんどい。」という言葉がぴったりで、コロナ対応の時期は休日も気の休まる日がありませんでした。今は、しんどさから解放されるのが待ち遠しいというのが正直な気持ちですが、校長でなくなった時に寂しさや空虚感が湧き出てくる気もしています。

校長として、一番に心がけたのは「職員にとって働きやすい職場にする。」ことです。そのために、難題は自分が受けて立つようにしてきましたが、「めあて」がどれだけ達成されたのか「ふりかえり」を行うと、「職員室の居心地は良くても、子どもたちがもっと良い姿にならなくては、先生たちの働きやすい職場とは言えなかった。」という反省が出てきます。校長会の研修で「一人の10歩より10人の一歩」という言葉を聞かせていただき、子どもたちのためなら時間を惜しまず努力できる先生たちに「早く帰れ!」だけでなく、そのエネルギーを向かわせる方向を明確に指し示し、皆で一歩を歩むことのやりがいを感じさせられなかったことを反省しています。

この38年間は、ただただ自分自身が子どもたちに、保護者や地域の方々に、そして先生たちに、育ててもらったという感謝の気持ちでいっぱいです。今後は学校からは離れますが、学校のために、子どもたちのために、何か間接的にでも恩返しができたらと思っています。



忘れられない 出会い

伊賀市立阿山中学校 校長
峯 晴美

振り返ると、たくさんの人に支えられ「出逢いには必然性がある」とつくづく感じる35年間でした。

初任から11年勤めた学校は、人懐っこくエネルギー溢れる子どもが多い一方で、いわゆる「荒れ」が続いている学校でした。当時は、授業を成立させることが目標の一つであり、空き時間は校内の見回りと教室から出てくる子どもたちとのやりとりで終わってしまうという毎日でした。教師の想像を遙かに越える生活背景を持つ子どもも少なからずいました。中でも多くの困難な問題を抱えさせられていたAとの出会いは忘れられないものになりました。その頃の私は「自分に何ができるのか」「これでよいのか」という不安と「Aの居場所になれば…」という葛藤の連続でした。結局Aは高校へは進学せず、就職した年の6月、初任給でコップを買って持ってきてくれました。そのときのAの笑顔が今も忘れられません。

それから15年近く経った時、30歳を越えたAから手紙が届きました。中学校時代つるんでいた友だちのこと…喧嘩で名をあげてもその時は良かったけれど、皆が高校進学に向かっていくとき寂しかったこと、その後の自分の行いや今まで過ごした厳しい生活、今思っていることや反省などが7枚に渡り綴られていました。私は、Aが本当に辛かったときなぜ聞いてやれなかったのか…多くの時間をAと過ごしていたのに、なぜ勉強を教えてやらなかったのか…と後悔しました。Aとの出会い、出来事が私の原点となり、その後担任した子どもや適応指導教室で出会った子どもたちの「本当の願いは何か」を知ることに努めてきました。

管理職となってからは、最前線で子どもと向き合う立場でないからこそ、教員と子どもを繋ぐことが私の仕事の一つだと考え、6年間、中3生徒全員と校長面談をしてきました。子どもたちの本当の願いや思いを知ることから学校経営は始まるという信念のもと、最後の1日まで自分らしくやりきりたいと思います。

紀北中学校長会

人とつながり、人をつなぐ!!
～未来を生き抜く子どもたちのために～

紀北中学校長会は、尾鷲市、紀北町の6校からなる中学校部会です。

生徒数は、尾鷲中学校299名、輪内中学校23名、紀北中学校123名、赤羽中学校11名、三船中学校35名、潮南中学校82名と、どの学校も生徒数の減少が顕著であり、今後の大きな課題の一つです。

私たちの部会の最大の特徴は「何でも話し合える」関係であること。これは今の私たちだけではなく、私たちの先輩である校長先生たちからずっと繋がってきているものです。部会のメンバーの顔ぶれが教員になった頃からの顔なじみであることで、それぞれのメンバーがどのような性格で、長年どのような教育実践を行ってきているのかを知り尽くしており、良しも悪しきも認め合っている関係です。

月に一度、部会を開催し、6名が集まることになっています。管内の学校が抱える課題、各学校の様々な取組、各行事の内容や日程調整など、真剣に議論を重ねるのはもちろんですが、定期的に夜の部会（懇親会）も開催し、プライベートの事や仕事とはかけ離れた話題で盛り上がっています。コロナ禍で先輩校長先生方の退職祝いが出来ていなかったのも、昨年から今年にかけて、関係のある若い先生からベテランの先生まで声をかけて盛大に行ったところです。この長年にわたって繋がってきた深く太い人間関係をこれからも大切にしながら、この地域で育つ子どもたちに最高の魅力のある教育を提供していけるように、力を合わせていきたいと思っています。



編集後記

令和6年1月、能登半島地震が発生。復旧した様子が少しずつ報道されるようになった9月、またしても能登地方は記録的大雨という大災害に見舞われました。地震と豪雨の「二重被災」は、ようやく生活し始めた仮設住宅や何とか入れを終えた白米千枚田にも容赦なく濁流をもたらしました。遡ると平成16年には、新潟県が7月13日の「新潟豪雨災害」、10月23日の「新潟県中越大地震」と、立て続けに大災害に見舞われています。私たちは「いつでも・どこでも・どんな災害でも」起きうる環境の中で暮らしていることを再認識し、被害を最小限にする

四日市市小学校長会

心強いTEAM
「四日市市小学校長会」

みなさんは四日市と言えば何を思い浮かべるでしょうか。石油化学コンビナートなどの工場地帯でしょうか。青空を取り戻すきっかけとなった四日市公害裁判でしょうか。

令和の四日市は、コンビナートに加えて半導体関連産業も有名になりました。さらに工場地帯は、「夜景クルーズ」として観光地になり、「かぶせ茶」「よっかいちトンテキ」などのおいしい食べ物も有名になりました。2027年には「バスタ四日市」も開業予定です。ぜひ機会があれば、青空いっぱい、夜景きらびやかな四日市にお越しください。

そんな栄えある四日市市内の小学校も、県内の小学校と同じくいくつかの課題を抱えています。その課題を解決、時には強みに変えていくべく、四日市市小学校長会は日々活動をしています。

また、四日市市小学校長会は市内37名で構成されている大規模な校長会です。日頃は地域等のつながりのあるA～Eの5つブロックに分かれて、情報共有や幾多の教育課題について相談をし合っています。月1回以上のブロック会議はもちろんのこと、会議後の昼食をともにしたり、懇親会を開催したりと、年間を通して活発に取り組んでいます。時に「孤独」と言われ、また常に判断を求められる校長職として、互いに補完しあい、しっかりと連携している心強いTEAMです。

「大きな事案」「緊急な事案」が起こった時、ブロック、役員会、拡大役員会そして全体校長会と組織がしっかり確立しているからこそそのメリットを強く感じます。

これからも子どもたちのために、県校長会の各地区の校長先生方とともに教育活動を一層推進してまいりたいと思います。



るため、実情に合った避難訓練の実施や地域連携など、自助・共助・公助を有機的に連携させた防災対策を講じる必要があると強く感じるところです。

そのために、まずは自己の心身の健康向上に努め、様々なことに柔軟に対応できる組織づくりをこれからも進めて参りましょう。『校長会みえ』では、今後も会員相互の情報交流や組織の充実、発展に役立つ紙面づくりを目指していきたいと思っています。ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。